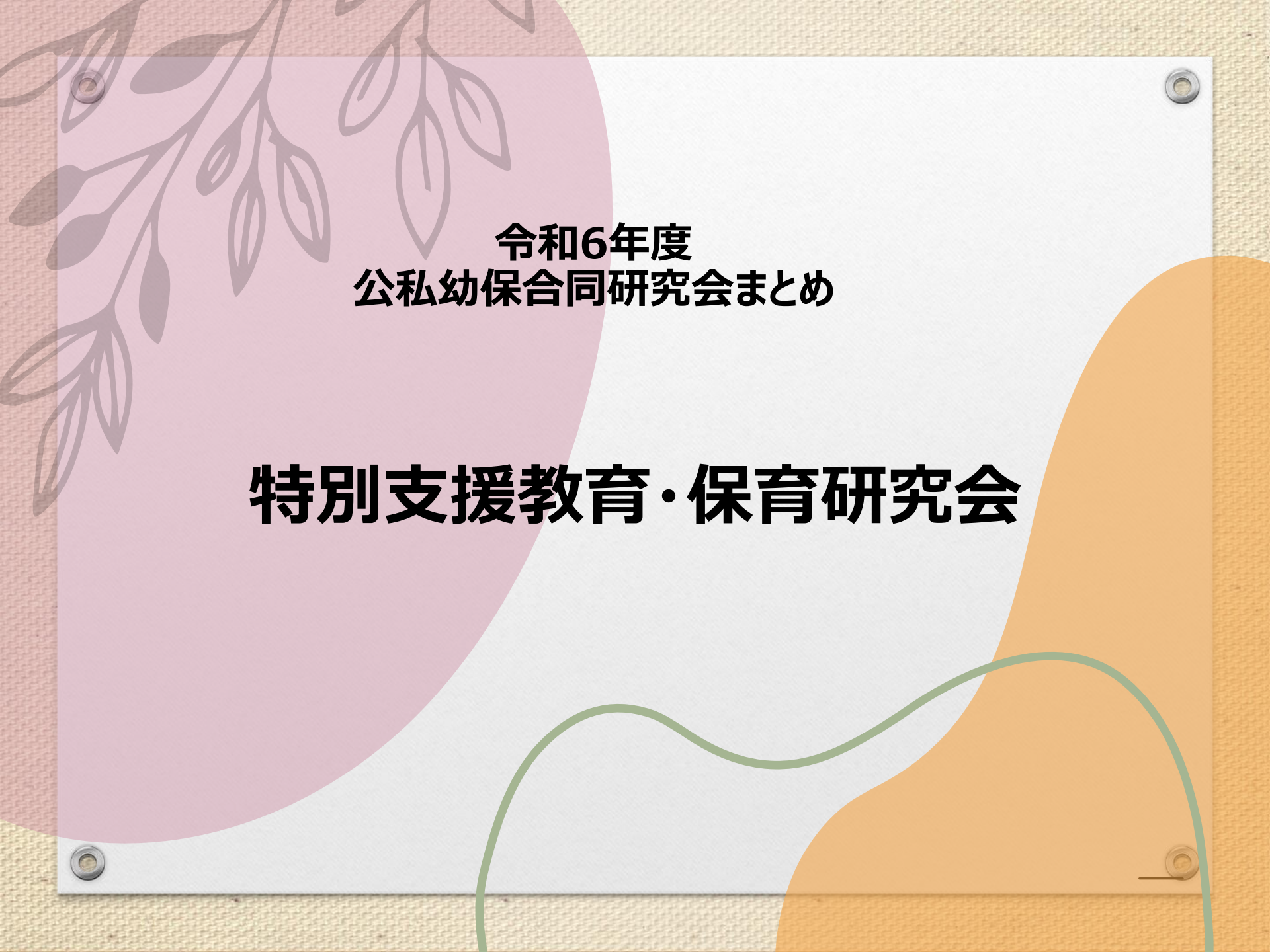




**令和6年度
公私幼保合同研究会まとめ**

特別支援教育・保育研究会

ねらい・内容

インクルーシブの理念を土台に、表に見える子どもの行動や姿を「なぜ？」の視点から見直し、具体的な保育や支援を実施し、検証する

テーマ

一人ひとりの子どもの特性を捉え、多様な子どもを含む**保育のあり方や環境を考える**

講師

大阪公立大学
准教授
木曾 陽子 先生

研究の方法

・子どもの行動の原因や背景を、「**なぜ？**」の視点をもって支援検討を行い、子ども理解を深め手立てを探る

・少人数のグループで、実際の子どもの姿やクラスの状況を共有し、事例検討、実践研究を行う

参加園所

大阪市立味原保育所	大阪市立鯉江保育所	大阪市立三国保育所
大阪市立梅本保育所	大阪市立西大道保育所	大阪市立矢田教育の森保育所
大阪市立大宮第1保育所	大阪市立阪南保育所	クオリスキッズ北梅田保育園
大阪市立加島第1保育所	大阪市立日之出育所	佃保育園
大阪市立加美第2保育所	大阪市立東小橋保育所	ももの木保育園
大阪市立木川第1保育所	大阪市立松之宮保育所	れもんのか玉造保育園
大阪市立喜連保育所	大阪市立万領保育所	
大阪市立住吉保育所	大阪市立南津守保育所	

実施一覧

回数	日時	場所	内容
①	5月31日(金) 14:00~17:00	保育・幼児教育センター	講義:理念と支援検討のプロセス、視点を変える、 子ども理解を深める、手立てを知る 演習:子どもの姿の共有 子どもの「なぜ」の検討 具体的な援助・手立ての検討
②	6月20日(木) 14:00~17:00	保育・幼児教育センター	演習:対象児の姿の共有、保育環境やデイリーの共有、 事例検討 講義:保護者への支援
③	7月19日(金) 14:00~17:00	保育・幼児教育センター	ここまでの振り返り 演習:事例検討①②
④-1	8月23日(金) 9:30~11:30 13:00~17:00	オレンジグループ園所 保育・幼児教育センター	子どもの観察実践(オレンジ) グループワーク:実践の振り返り①② 事例検討③④
④-2	9月10日(火) 9:30~11:30 13:00~17:00	みどりグループ園所 保育・幼児教育センター	子どもの観察実践(みどり) グループワーク:実践の振り返り①② 事例検討③④
⑤-1	9月25日(水) 9:30~11:30 13:00~17:00	きいろグループ園所 保育・幼児教育センター	子どもの観察実践(きいろ) グループワーク:実践の振り返り③④ 事例検討⑤⑥
⑤-2	10月17日(木) 9:30~11:30 13:00~17:00	ピンクグループ園所 保育・幼児教育センター	子どもの観察実践(ピンク) グループワーク:実践の振り返り③④ 事例検討⑤⑥
⑥	11月7日(木) 14:00~17:00	保育・幼児教育センター	グループワーク:実践の振り返り⑤⑥、困難事例の検討 講義:子ども理解をさらに深める視点
⑦	12月5日(木) 14:00~17:00	保育・幼児教育センター	講義:これまでの振り返りとまとめに向けて 演習:まとめの作成
⑧	1月31日(金) 14:00~17:00	保育・幼児教育センター	演習:個人まとめ報告と修正 グループでのまとめ作成
⑨	3月3日(月) 14:00~17:00	保育・幼児教育センター	研究報告会 最終講義

第1回 講義①:理念と支援検討のプロセス

特別支援教育の理念

- ・ 2007年4月から、すべての幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校において行う
- ・ 特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。
- ・ また、特別支援教育は、これまでの特殊教育の対象の障害だけでなく、知的な遅れのない発達障害も含めて、特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍する全ての学校において実施されるものである。
- ・ さらに、特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒への教育にとどまらず、障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となるものであり、我が国の現在及び将来の社会にとって重要な意味を持っている

文部科学省(2017) 『特別支援教育の推進について(通知)』平成19年4月1日

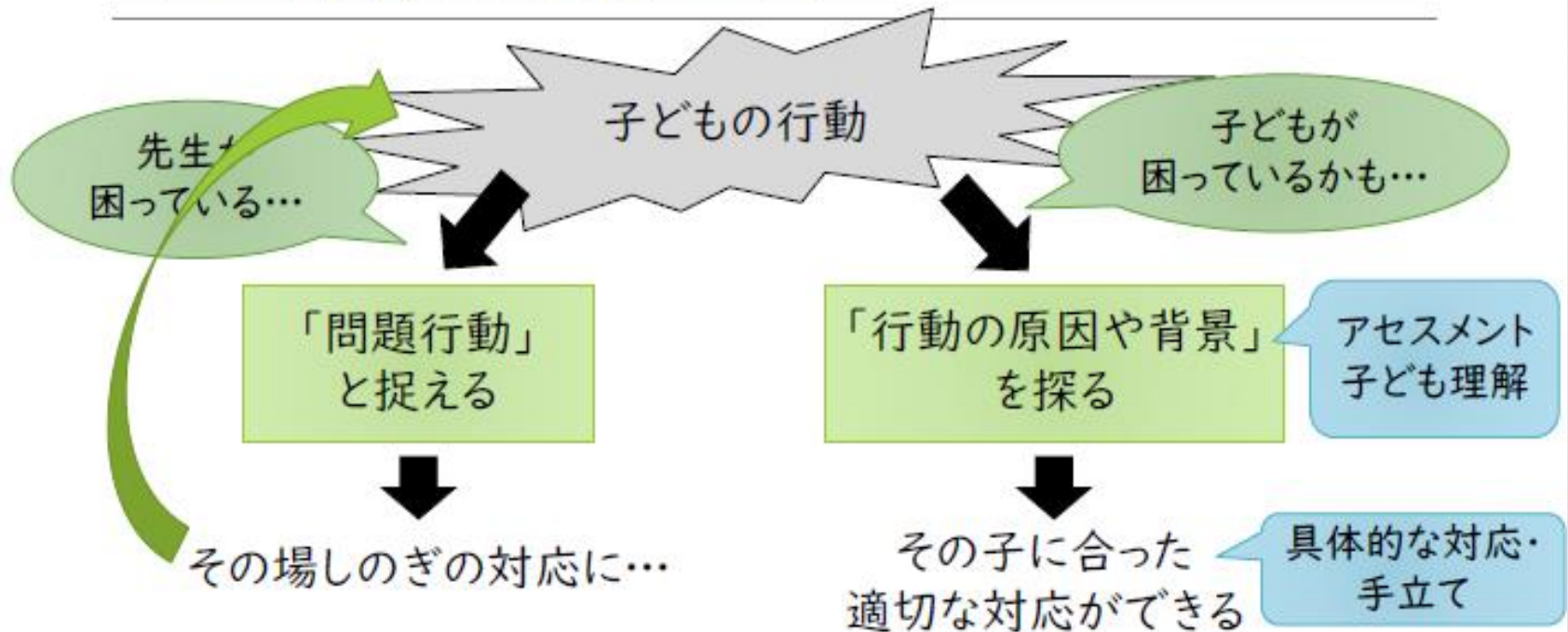
https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11402417/www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07050101.htm

大切にしたいこと

1. **インクルーシブ**な保育を目指す
 - 一人ひとりが「違う」ことを前提にする
 - 「包み込む＝排除しない」とはどういうことかを考える
2. 「公正」のために**合理的配慮**を行う
 - 「同じ場において何もしない」ではなく、必要な配慮を可能な限り行う
3. **ユニバーサルデザイン**を意識する
 - はじめから、できるだけみんなにとってよりよい環境を模索する

第1回 講義②:視点を变える

なぜ視点を变えるのか...



早期から適切な対応をすることで...

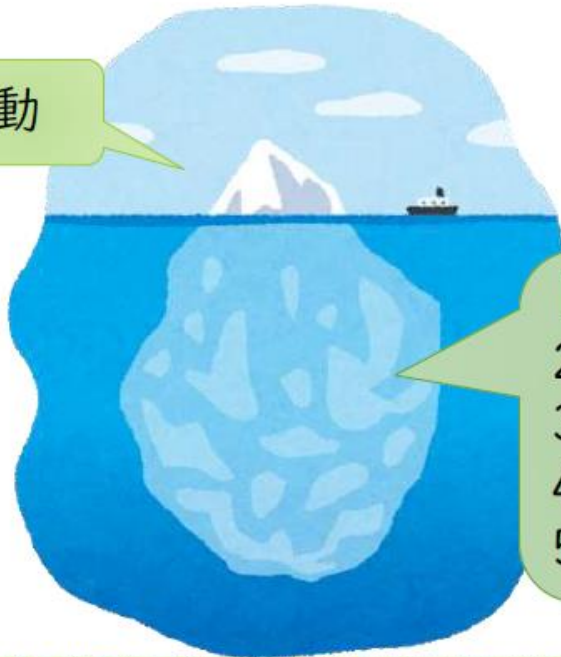
★子どもの力を最大限に引き出す

★自己肯定感を下げない→二次障害の予防

第1回 講義③:子ども理解を深める

子どもの行動の冰山モデル

行動



★トップダウンかボトムアップか
意図的な行動か無意識的な反応か

1. 感覚 (5感+固有覚・前庭覚)
2. 記憶
3. コミュニケーション能力
4. 興味・理解
5. 集中力・思考のくせ

藤原里美 (2015) 『多様な子どもたちの発達支援 園内研修ガイド』 学研教育みらい

モナ・デラフーク (2022) 『発達障害からニューロダイバーシティへポリヴェーガル理論で解き明かす子どもの心と行動』 春秋社

発達の視点、集団との関係、行動の前後から読み解く、他の場面もよく観察するなど

総合的にアセスメントする

1人ひとりの子どもをトータルに理解する

第1回 講義④:手立てを知る

基盤:子どもが安全と感じられるように

1. 環境の調整

構造化

- 1) 場所 ・どこで何を ・決まった場所、広さ
- 2) 時間 ・いつ何を ・どの順番で
- 3) 活動 ・量、内容、いつ終わる、その後どうする



視覚支援



ユニバーサルデザインへ

2. 力を伸ばす活動 1) からだづくり 2) ことばあそび 3) 見る力・聞く力を伸ばす活動

3. 行動への支援 子ども自身が「どう行動すればよいか」を学べるような支援を実施する

4. コミュニケーション支援

- 1) インリアルアプローチ 遊びのなかで子どものコミュニケーション力を高めることばかけ
- 2) 子どもが使いやすい手段を探る 発声、視線、指さし、ベビーサイン、アプリなど
- 3) コミック会話 目に見えない「気持ち」を視覚的に表現する
- 4) よりわかりやすいことばかけ

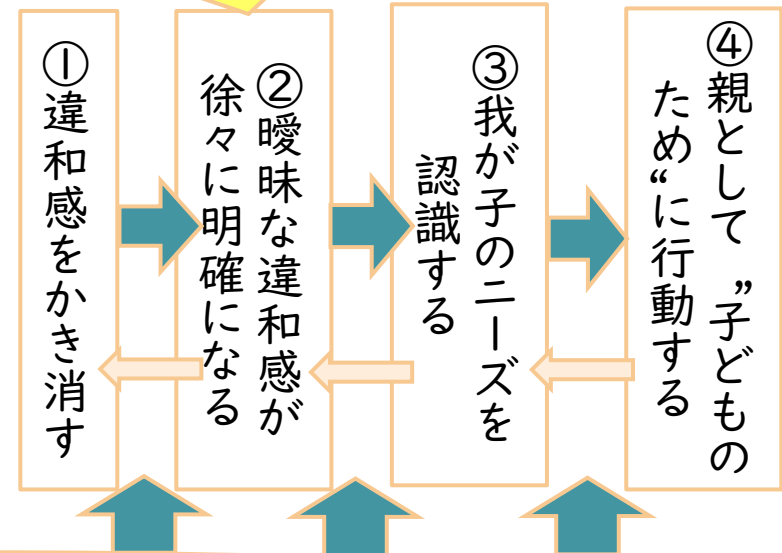
第2回 講義：保護者への支援

保護者の「障がい受容」とは

- ・「子どもの障がいを受け入れて前向きに生きる親」がゴールではない
- ・子どもに「障がい」があることを理解していても、その背後には複雑な思いがある⇒それが様々な保護者の言動につながる（表面に見える言動だけで判断しない）
- ・子どもの障がいの種類によっても保護者の思いや障がいを認識するプロセスは異なる可能性がある

母親の気づきのプロセス

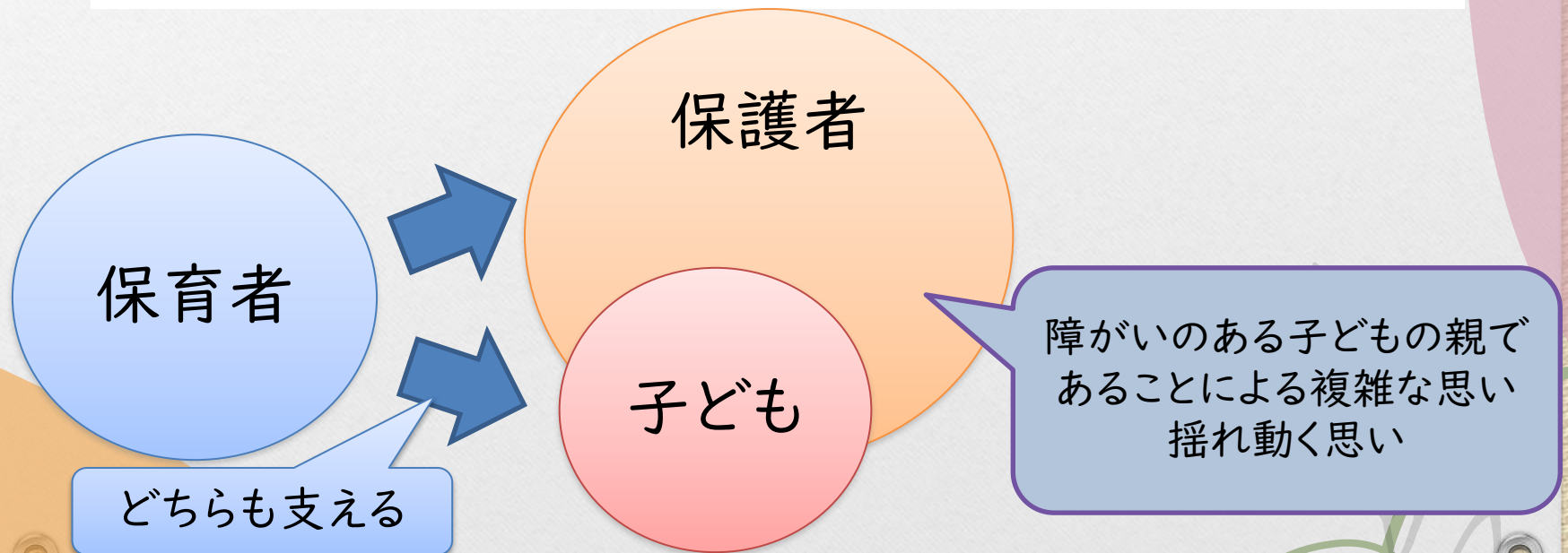
意図的に“待つ”こと！



影響を与える他者：
保育士、保健師、医師、家族、親戚、母親仲間、友人、職場の同僚など

一障がいのある子どもの保護者への向き合い方ー

- ・障がいのある子どもの保護者も支援対象である
- ・共同療育者としての役割だけを求めない
- ・“保護者の立場に立って考える”が鉄則
→保護者に寄り添う、一緒に悩む、一緒に考える



第3回 振り返り、事例検討演習

事例検討の手順

- ①・事例提供者、司会、タイムキーパー、発表者を決める
 - ・事例提供者から簡単な説明を行う
 - ・事例提供者に全員で質問をし、情報収集をする
- ②・グループで決めた「気になる姿」について理由や背景(なぜ?)を考える
 - ・出てきた「なぜ」の中から有力候補2つ程度に絞り、支援検討シートの「なぜ」の欄に記入する
- ③・有力候補の「なぜ」に対する「具体的な援助・手立て」を付箋に書き出す
 - ・それぞれの付箋を見せ合い、援助や手立て整理シートの枠組みを参考にしながら整理する
 - ・整理した「援助・手立て」の中から実践したい手立てを2つ選び、支援検討シートの「援助・手立て」欄に分類する

第4.5回 子どもの観察・事例検討報告

◎子どもの観察実践(9:30～午前中園所にて実施する)

グループの中で、1人の対象児を決めて行う(各グループ1回ずつ全4回)

対象児の姿を観察し、実態を把握する

子どもの姿、子どもに関する情報を各グループで話し合い共有する

観察実践を踏まえた事例検討を行う

◎グループワーク(実践の振り返り、事例検討)

毎回、事例提供者を交代し、グループで事例検討を行う

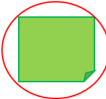
事例検討で考えた手立てを園所に持ち帰り、実際にやってみる

次回は、前回の事例検討で考えた手立てを実際にやってみてどうだったか

その後の対象児の様子を報告する



援助や手立ての
整理シート

	1) 物的環境の調整 ※あらかじめ準備	2) 全体への支援や 保育方法の変更	3) 対象児への個別 支援
「なぜ」① 		 	
「なぜ」② 	  		 

第6回 講義：子ども理解をさらに深める視点

自閉スペクトラム症（ASD）の特徴

- ・ 社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥
- ・ 行動、興味、または活動の限定された反復的な様式

自閉スペクトラム症（ASD）の認知特性

- ①共感－システム化理論
- ②実行機能理論
- ③弱い中枢性統合理論
- ④社会脳理論
- ⑤感覚の偏り（過敏すぎる、鈍感すぎる）

愛着（Attachment）について

- ・ 愛着（アタッチメント）の機能
- ・ 愛着（アタッチメント）の機能不全

「なぜ」を考えるために

- 子どもの主観的な感覚や世界を知ろうとする
- 様々な側面の発達を知る
- 複数の情報を統合して考える

一人ひとり「違う」ことを前提に、
どうすれば分かり合えるか、
どうすれば共に生きられるかを考える

第7回 講義：これまでの振り返りとまとめに向けて

◎第1回から第6回までの振り返り

特別支援教育・保育研究会の講義での学びを確認する

◎個人のまとめの作成

実践研究によって検証した結果を報告するため「まとめ」を作成する
＜内容＞

1. 子どもの姿
2. なぜ？
3. 具体的援助・手立て
4. その後の様子・気づいたこと
5. 実践研究全体を通した考察

第8回 個人のまとめの報告と修正・ グループでのまとめの作成

◎個人のまとめの報告と修正

◎グループでのまとめの作成

- ・発表形式 グループごとのポスター発表
- ・グループごとにPPTと模造紙に学びとなったことを入れて作成する

第9回 研究報告会 最終講義

研究報告会で1年間の学びと成果を発表しました



一年間おつかれさまでした

オレンジグループ

2歳児 男児

- ・子ども23名、担任4名
- ・車やコンビカーで遊ぶのが好き
- ・友達のことが好き
- ・友達がしていることが気になる
- ・普段は自分の思いを言葉で伝えている

気になる姿

秋頃から自分の思い通りにならないと「あー！」と大きな声を出す

例：友達が先に使いたい玩具で遊んでいる時

片付けの時 など



なぜ？

- ・大きな声を出すと保育者が気付いてくれる
- ・思い通りにないことがどうしてもモヤモヤする

具体的援助・手立て

- ・クラス全体で友達との関わり方や玩具の貸し借りの話をし、みんなで関わり方や貸し借りの仕方について知る機会を作る。
- ・玩具の取り合いで友達とトラブルになることがあるので、数を用意できる玩具は増やす。
- ・子どもの様子を見守りながら嫌な気持ちになる前に「どうしたの？」「大丈夫？」等、大きな声を出さなくても先生は見ているということを伝える。



その後の様子・気付いたこと

- ・全体で話をしている時は保育者の話を聞いている。実際に玩具の貸し借りが上手くいかなかったり、友達と気持ちがつぶかり合ったりした時には大きな声を出す姿があるが、全体で話をすることで大きな声を出す回数や時間は短くなっている。
- ・玩具の数を調節することで、取り合いや玩具を求めて泣き叫ぶことが減ったように感じる。気持ちを切り替え、違う遊びをする姿も出てきた。
- ・嫌な気持ちになる前に声をかけることで比較的落ち着いて事情を話してくれるようになった。

実践研究全体を通して

研究会を通してその子どものことを深く考え、自分の保育について見直す機会をもつことができた。

グループで話し合うことで、自分だけでは思いつかなかった保育の進め方をアドバイスしてもらい、勉強になることが多かった。

研究会に出るまではあまり意識しきれていなかった子どもの行動・発言の「なぜ？」の部分が、この研究会を通して見直し意識することができた。



①子どもの姿

【4歳児 女児】

- ・自信がもてるとずっと同じ遊び（折り紙、クローバー探し）
- ・初めてのことや自信がないことだと、集団での活動に参加しづらいので、見て参加
- ・自分の気持ちをなかなか言葉で伝えられず、叫んだり、泣いて怒ったりして表現
- ・保育者や特定の友達が大好きですぐくっ付きたくなる

○保育者にゆっくり相手をしてほしい、わたしのことみて？

☆上手く、その気持ちを表現する言葉が見つからない？

②なぜ、嫌なことがあると後から泣いたり叫んだりするのだろうか？

●泣くことで嫌だった気持ちを表現？

□不安状態から解放？（やってみたいけど怖いとの葛藤）

③具体的な援助・手だて

- 普段から「みているよ」の言葉をかけたり、肯定的な声かけや接触をしたりしていく
- ☆泣く・叫ぶ以外の手段を伝えたり、一緒に考えたりしていく
- 泣き止み落ち着いてから話を聞く、じっと待つ、その後気持ちを受け止める
- 繰り返し挑戦できる機会を作っていく

④その後の様子・気付いたこと

- 普段から肯定的な言葉がけを心掛けて対応することで、嫌だと感じた時に、意識的に保育者の方を見たり、保育者の近くまで来て泣いたりすることが増えたため、有効的であった。
- ☆→「嫌な気持ちになったりしたら先生を呼んでいいからね」と伝えていくことで、泣いたり叫んだりすることは減り、泣きそうになる前に「○○したかった」等自分の言葉で表現することが増えた。保育者が考えた解決方法しか試せていないので今後本児と一緒に考えて見つけていきたい。
- 泣いているときには無理に話し掛けず、「泣いてもいいよ」「泣き終わったら話をきくね」と伝えていくことで、自分で泣き止み、切り替える姿があった。まだ上手く言葉で表現ができないため、保育者が「○○だった？と聞くと、繰り返しその気持ちを言葉にする姿がある。
- ドッジボール等の新しい遊びでつまずくことが多かったため活動の中で新しい遊びを積極的に取り入れる。最初のうちは見ての参加だったが、だんだん保育者と一緒にできるようになってきており、本児の口から「もっとやりたかった」や「一緒にやろう？」と出てくるようになった。

⇒子どもの姿を観察していると、泣いたり、叫んだりすることが起こる前に、一人になってみたり、葛藤している姿がある。自分で解決しようとする気持ちもあるので引き続き見守っていきながら、必要な時に方法を伝えていったり、気持ちを受け止めたりしていきたい。

⑤研究会全体を通した考察

グループメンバーで一人の子どもの気になる姿をじっくり考えていくことで、自分が考えていた理由だけではなくいろいろな視点から子どものなぜを見つけていくことができた。同じ子どもの姿もこう思っているのかも、ここに困っているのかもと考えながら接していくことができたので、その子ども自身のことをさらに知ることができたように感じる。保護者対応についてもたくさん考えられたいい機会であった。子どもだけでなく保護者にも寄り添っていきながら困り感を抱えている親子の手助けをしていきたいと感じた。

4歳児 18名
担任 2名

4歳児
Aくん



- ・粘土遊びやままごと、ブロックが好きで、気の合う友達と遊んでいる。
- ・物を置く向きや衣服などにこだわりがある。
- ・集団遊びなど、初めての活動は部屋の隅から友達の様子を見ていることが多い。
- ・気持ちが崩れたときは個別の対応が必要。

<気になる姿>

自分の思いが通らないことがあると、上靴や玩具など物を投げる。



<なぜ？>

- ・物を投げることで嫌なことを除去している。
- ・自分の思いをコントロールすることが難しい。



<具体的な援助・手立て>

- ① 気持ちを代弁したり、共感したりする。
- ② 保育室の隅にパーテーションを置き、物を投げる前にそのスペースの中でクールダウンができるようにする。
- ③ 物を投げなかったときは認めて、褒める。

<その後の様子・気付き>

① 気持ちを代弁したり、共感したりする。

- ・自分の気持ちを理解してもらっていると感じているのか、保育者の代弁を頷きながら聞いていた。
- ・気持ちを受け止めてもらうことで落ち着き、物を投げずに自分の思いを保育者と一緒に言葉にすることができた。

② 保育室の隅にパーテーションを置き、物を投げる前にそのスペースの中でクールダウンができるようにする。

- ・物を投げる前にそのスペースへ一緒に行くことは難しかったが、物を投げた後に気持ちを切り替える場として活用することはできた。

③ 物を投げなかったときは認めて、褒める。

- ・褒めてもらうことで、嬉しそうな表情が見られた。
- ・気持ちが落ち着いてから「なにが嫌だったのか」、「自分の思いが通らないときはどうしたら良いのか」を保育者と一緒に考えることができた。

<研究会全体を通した考察>

- ・一人の子どもの気になる姿について、グループで考え、話し合うことで自分一人だけでは見えていなかった視点からその子どもの姿をとらえることができた。また、「なぜ？」に応じた援助についてもグループ内で提案しあうため、自所に戻ってからすぐに実践に移ることができた。
- ・保育者の言葉がけや援助の方法、環境の構成により、子どもの姿が変化していくことを実感したため、今後も一人ひとりの子どもに合った援助を考え、実践していきたいと思った。



4 歳児 男児

- ・声や動きが大きく、活発
- ・保育者や友達と関わるのが好き
- ・言語面での認識が幼い
- ・どんな活動にも積極的
- ・集団遊びやゲームで勝ちにこだわる

気になる姿

危険な行動に対し、
注意しようとする
「いや」と笑って逃げる。



なぜ話を聞く状況から
逃げるのか？

なぜ？

- ① 話の内容が難しくて
分からない？
- ② 話をすることが否定される、
怒られることだと感じて嫌がる？

具体的な援助・手立て

① かみ砕いて話を短くする。



一番伝えたいことだけを簡潔に伝えと、
目線も合い聞いている様子だった。
→話を長引かせず、早めに切り上げることが有効。

②保育者が遊びの中で失敗する姿
を見せて、負けの姿も肯定する。



「誰でも失敗することはある」「負けが悪い
ことではない」ということを伝えたかったが、
見て笑っているだけだった。
→効果は感じられない。
→子どもの姿と手立てにズレがあった。
(勝ちにこだわる姿への支援になっていた)



これらの支援を通して…

言葉だけでは理解することが難しい本児にとって、保育者の話が分かりやすくなった！

②について再検討した。「負け」「否」を認めても大丈夫、あなたがいてくれて嬉しい
ということを伝えるには、本児の話をしっかりと聞き、共感することだと考えた。
そうすると、受け止めてくれると感じたのか、逃げずに保育者の目を見て話を聞く姿勢になり、
対話へのハードルが下がったように見える。

その後の様子・気づき

研究会全体を通した考察



- ・子どもの言動に対し「なぜ？」をいろいろな
視点で追究することで、新しい発見がある
ことが分かった。そこで出た方法を実践しても
うまくいかないこともあるが、その過程が
子どもの姿を見つめ直す良い機会であり、
検討を重ねることに意味があると感じた。
- ・しようとしている活動で、「子どもの何を
育てたいのか」を考えることが大切だと分かった。
そのねらいに向けて、手段や支援方法は
一人ひとり違い、いろいろとやってみることが
子ども理解へとつながると思った。

子どもの姿（2歳児 Aちゃん）



- ・音楽に合わせて体を動かしたり、歌ったりすることが好き
- ・パズルや絵本で遊ぶことが好きで一人遊びが多い
- ・音に敏感
- ・なにかできないことがあると癇癪を起すことが多い

気になる姿

- ・自由遊びの際に、室内を歩き回っていることが多く1つの遊びに集中することが少ない。

なぜ？

- ・周りの様子が気になる
- ・遊び方が分からない
- ・体を動かしたい

具体的な援助・手だて

その後の様子・気付き

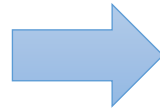
- ・1対1で関わる時間をつくる。→ 室内を歩いている際に声をかけ、保育者と1対1で遊ぶ時間をつくることで「こう？」と遊び方を確認しながら遊ぶ姿が見られた。また、「できない」「やって」と保育者にすぐ助けを求めている玩具も、本児の中で「やってみよう」という気持ちが芽生え、少しではあるが、自分でやってみようと挑戦していた。今まで興味がなかった遊びでも他児が遊んでいると「〇〇ちゃんもしてもいい？」と声をかける姿が見られ、少しの時間ではあるが一緒に遊ぶ姿が見られるようになってきている。
- ・戸外に行き、体を動かす。→ 園庭がないので毎日戸外に行けるわけではないが、天気の良い日は散歩に行き公園で体をしっかりと動かした。簡単なルールのある遊び(しっぽとり、かけっこなど)も行ったが、すぐに疲れ休む姿が見られた。戸外でたくさん走った日は、室内で落ち着いて過ごす。ということもなく、普段と変わった様子はなかった。

※以前より室内を歩き回することは減ってきているが、まだまだ1つの遊びに集中することは難しい。保育者がそばにつくと落ち着いて遊ぶことができるので、丁寧に遊び方を伝えながら本児に合わせて関わりたいと思う。

研究会全体を通した考察

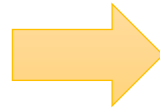
グループ全体で一人の子どもに対しての「なぜ？」を考えることで、自分では思いつかなかったような考えや視点に気付くことができた。全体で考えることで子ども個人に対する支援、クラス全体に対する支援など様々な支援方法を知ることができた。また、どの子どもに対しても活用できるものであり、今後の保育を行う際のヒントとして生かしていきたいと思った。

①個別の経験を超えて 本研究で学んだこと



- 気になる姿だけでなく、なぜその言動があるのかその背景に目を向けていくことの大切さに気付いた
- 気になる姿が現れるときに着目していたが、そうでないときとの違いは何かを検討することで、子どもの理解につながった
- 対象児への個別支援だけでなく、全体に向けた支援を行う手立てもあることを学んだ

②今後、それぞれの実践に何をどのように生かしていきたいか、またどのようにすることで生かせるか



- 集団の中で対象児を捉えるだけでなく、個人として捉えることで、より丁寧な支援をしていきたい
- 家庭での様子を知り、情報共有をしていくことで共通認識のもと援助をし子どもの成長につなげていきたい

きいろグループ

～私たちの1年間のあしあと～

特別支援教育・保育研究会まとめ

◎子どもの姿 ◇3歳児 Aちゃん◇

6月より入所。落ち着きがなく動き回っている様子が多い。部屋の中で遊んでいるときに、椅子やおもちゃの箱にのぼってジャンプを繰り返す姿が見られる。危険なので止めようとすると、大きな声で泣いて怒ってしまう。止められてものぼることをやめられず繰り返す姿が見られる。



◎なぜ？

- ①好きな遊びがなく、のぼることが遊びになっている。
- ②足裏の刺激が気持ちいい。

◎具体的な援助・手立て

- ①ふれあい遊びを取り入れ、楽しく安定した時間をつくる。
- ②足裏の刺激コーナーをつくり、落ち着ける場所をつくる。



◎その後の様子と気付いたこと

- ①体を動かすことが好きで、体への刺激や大きな動きは好んでいた。しかし、本児の遊びたいタイミングではなかったり、外に出たくて室内にいなかったりして、ふれあい遊びを継続して続けることができなかった。
- ②小さな台にビニール袋でシャカシャカする所をつくったり、人工芝で足裏の刺激を感じられるコーナーをつくったりした。はじめは喜んで乗って遊んでくれたが、すぐに飽きてしまい継続して遊ぶことはできなかった。

ある日、突然、椅子や台に上ることがなくなった。保護者に話を聞くと、家庭で台からジャンプができるようになり、誉めてもらえたことが嬉しくて、繰り返す行ようになったとのことだった。その後、家庭でジャンプを繰り返すので注意され、ジャンプをするのをやめた。その後、保育所でも家庭でもジャンプすることがなくなった。

部屋を動き回る姿は継続して見られているが、好きなおもちゃを見つけて遊ぶ姿が増えてきている。やりたいことを自分で伝えようとする姿も増えているので、本児の気持ちに寄り添い、楽しい時間をたくさん経験できるように見守っていきたい。

◎研究の実践全体を通した考察

- ・研究会を通して、子どもの気になる姿の「なぜ？」を他所の保育者と共有し、援助を考えることで違った視点から子どもの姿を捉えることができた。その中で見つけた手立てを試してもうまいかない所もあったが、Aちゃんの困りを再確認し、より向き合うことができた。
- ・今回の援助によって、期待していた姿は見られなかったが、保護者との連携の大切さや家庭の様子を知ることによって子どもの姿がより見えることを実感したので、今後の保育に生かしていきたい。

4歳児 男児（外国籍）
クラス：25名 担任：2名



気になる姿：友達に砂をかける



子どもの姿

- ・楽しいことだいすき！友達だいすき！
- ・気持ちや行動のコントロールが難しい
- ・勝ちや一番へのこだわり
- ・自分のやりたいことができないと、切り替えができない



なぜ？①

友達の反応がおもしろい？

なぜ？②

人の目を引きたい？



具体的な援助・手立て

- ① ・投げるものを紙やヒモなど、違うものにする
・自分自身の顔写真で表情カードをつくり、相手の気持ちを知らせる
- ② ・人の前に立つ役割を与える

その後の様子・気付いたこと

- ① 投げるという行動を否定せず、違うものを投げて発散できるように新聞紙遊びを取り入れた。上学的に向かって投げることを初めは楽しんでたものの、時間とともに楽しくなってくると数分で友達に向かって投げたり「やめて」と言われても頭に紙を乗せたりする姿があった。そうなる前に「こんなことしてみよう」と保育者が違う遊び方を提案し関わると、安全に遊んでいた。
- ① 表情カードはイラストのものと、用意した顔写真のものを使用したが、あまり効果はなかった。自分の顔は自分で見る機会が少ない、との指摘もあり今はイラストのものを使用しながら友達の気持ちを知らせている。
- ② 一番や特別なことが好きなので、みんなには内緒で保育者と「泣いてる子がいたら先生に伝えに来る当番」を始める。自分だけの当番、ということを喜んで、泣いている子がいたら教えに来ることも多く、その際に「教えてくれてありがとう、助かるわ」と褒めることで喜び、気持ちが落ち着く様子が見られた。自分が友達を泣かせたときは言いに来ず、保育者の顔をちらっと見て顔色を窺っている。

*研究会で他の実践を聞き「止めて」と言われたらやめる」というルールをクラスで作る。本児も分かっていて友達に対して言う姿はあるものの、自分でルールを守ることは難しい。その都度一緒にルールを確認している。

実践研究全体を通した考察

- ・保育が難しいと感じたり、支援に悩んだりすることが多く、自分自身もしんどい思いながら保育をしていた。子どもの姿を見て“なぜか”を考えても分らなかったことが、グループで検討することで自分では思いつかない考えが出て、改めて深く考えることができた。また先生の「まずは子どもがかわいいと思えたら OK」という言葉が印象的で、実践する中で意識的にその子どもと関わり一緒に遊ぶことで「かわいいな」と思うことが増え、子どもへの見方が少し変わったように思う。目立って見えるところだけでなく、隠れている子どものいいところにも気付いていきたい。
- ・自分の保育所を見に来てもらう機会があったことで、第三者の視点から自分では気付かない子どもの姿を教えてもらうことができ、すごくよかった。一緒に遊ぶことはもちろんだが、一歩引いて子どもやクラスを見ることで新たに見えてくるものがあるのだと実感した。今後も子どもが“なぜ”その行動をするのかを考え、その子に合った環境づくりや関わり方、保育を実践していく。



5歳児クラス 25名

【1.子どもの姿】

5歳児クラス A君

- ・発想力が豊かで考えたことを言葉にして上手に伝えられる。
- ・周りを引っ張っていく力があり遊びの発想が豊か。遊びへの思いが強すぎて一方的に考えを押し付けてしまうところがある。



【2.気になる姿】

- ・自分がしたい遊びを友達に強要してしまう。
(指示を出して遊ぶ)

【3.なぜ】

- ①言うことを聞いてもらうことで自分が安心する。
- ②遊びのアイデアがとまらない。



【4. 気になる姿のなぜ？を考えて・・・】

・具体的な手立て・援助

- ① 本児が考えた遊びに保育者も一緒に参加する。
→保育者が一緒に遊びに入ること、本児だけではなく、他児の思いも取り入れ遊びをどんどん広げていくことができる。
- ② アイデアノートをつくる。
→一度きりの遊びにならないようノートをつくることで見返すことができたり、特別感を感じたりすることができる。

【5. その後のA児の様子】

- ① 保育者も一緒に参加して遊ぶ
・保育者が入ること、今まで入ってこなかった子どもたちが「いれて」と遊びに参加してくるが増え、本児も「いいよ」と一緒に遊ぶ姿があった。遊び自体は本児が考えた遊びが多いので、「ここはこうして」「こうやって」という姿はまだあるが、保育者が入り他児との関わりを仲介することで、参加しているみんなで遊びを広げていくことができた。
- ② アイデアノートをつくる
・〇〇くん遊びを考えるの上手だからみんなで何回でも遊べるようにノートをつくる？」と提案するととても嬉しそうにしていた。ノートをつくったことでさらにアイデアは増え、「せんせいこれもノートかこう」とノートに遊びが増えていくことを喜んでいた。これらを通して、たくさんアイデアを出したくさんの友達と遊んだことで満足した姿があり、最近は別の男の子達と走ったりボール遊びをしたりする姿に変わってきている。周りがやりたい遊びを提案することも多く友達の思いも受け入れながら遊ぶ姿が見られる。

【実践研究会全体を通して考察】

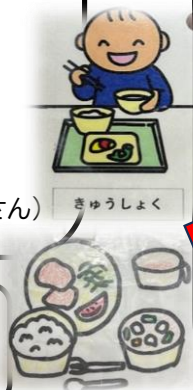
- ・研究会を通して子どもの姿のなぜを深く考えていくことの大切さ、援助と一緒に考えていくことの大切さを改めて知ることができ、今までの自分の保育の振り返りにつながった。普段保育に追われ一人の子どもの気になる姿をじっくり考えることがなかなかできない中、この研究会で他園所の先生方の意見を聞くことで新たな考え・援助を教してもらい学びとなった。今までは「こうしなくては」「こうやるべき」という考えがあったが、そうではなく、『子どもが選べる環境』『主体性の大事さ』に改めて気付いた。主体性を大事に今後も保育をしていきたい。

◎子どもの姿

- ・3歳児 Aくん
- ・発語が不明瞭で思うように言葉が出ない
- ・単語を並べて伝えようとする

◎好きな遊び

- ・人形、車などでごっこ遊び(ひとり遊び)
- ・粘土などの感触遊び
- ・戸外での集団遊び(だるまさんがころんだ、むっくりくまん)



A児の気になる姿

- ・朝の会や、クラス全体に話をしている時に部屋を出る

なぜ？

- ① 部屋を出ることに特に意味はない？
- ② 「今」したいことは「それ」じゃない？



◎気になる姿のなぜ？から考えた具体的な手立て・援助

- ① 部屋を出ることに特に意味はない
→意味がないのであればお部屋にいることの楽しさを伝えていく
 - ・粘土をしながら朝の会に参加する
 - ・人形を使って関わってみる
- ② 「今」したいことが「それ」じゃない
 - ・支援カードを使って2択でAくんに好きな方を選んでもらう

◎その後のAくんの様子・気づいたこと

- ①手立てを考え、実践するタイミングで、Aくんが家で怪我をした。そのため、動く痛みがあったのか普段よりもおとなしく、部屋を出たがなくなかった。机上遊びを好むことが増え、具体的な手立ての①はする必要が無かった。また、その後もこの怪我を機に部屋から出ることが減ったように感じる。
- ②部屋を出ることは少なくなったので、Aくんの「いや」なことで2択での支援カードを活用した。給食を食べたくない、手を洗いたくない、服を着替えたくないという時に2択から選ぶという手立てを行うと、「いや」もなく、じっと支援カードを見つめて「こっち」と指を指してスムーズに切り変えることができた。
例、シャワーor着替え
子どもが食べている絵 or 給食の絵など
※Aくんが自分自身で決めたことで、結果的に大人がして欲しいことになっていたとしても、Aくんにとっては「指示された」から「自分で決めた」に変わることから、自分で行動したいという気持ちのもち方も変わったと推測される。



～研究会全体を通した考察～

気になる子どもの「なぜ？」についてグループで話し合いをする中で、客観的な考え、意見を得られることがわかった。

子どもの気になる姿について話すと「今までこうだから、たぶんこうなる」など子どもの今の姿ではなく保育者の主観が混ざり、行動の意味を深く掘り下げるができなかった。研究会では、気になる姿のみに焦点をあて、様々な視点から意見を頂けた。そのため、子どもがどのような表情をしているのか、どのような遊びが好きなのかなど、先入観なく考えることができた上に、無意識のうちに除外されていた「なぜ？」の理由や気になる姿への対策を知ることができた。

🌸子どもの姿

- 2歳児 A ちゃん
- 友達のことがだいすき
- お話しすることがだいすき
- ごっこ遊びがだいすき
- 以前に話したことや見たことをよく覚えている



🌸気になる姿

- 活動と活動の間に他のことが気になり、
気になったことに夢中になる姿がある
(友達に話しかける・1人で何か話している…など)

🌸なぜ

- ① 目に入るものが全部気になる
- ② 声に出して話している感覚はない



🌸具体的な援助手立て

- ① 短い見通しを伝えてその事柄が終わったら
保育者のもとに戻って来るようにする
(戻って来たら保育者とハイタッチなど)
- ② 2人ペアで行動する
- ③ 好きなことを話す時間をつくる

🌸その後の様子と気が付いたこと

- ① 短い見通しを個別で伝え、その事柄が終わると保育者のもとに帰ってきてハイタッチをしてみるようにしてみるも、その途中で他のことが気になり保育者のもとに帰ってくることはなかった。しかし、保育者が「今何する時だっけ？」と尋ねると、「あ、〇〇する時だ!」「えーっと、わかんない」などとその時々によって何をするのか思い出せたり出せなかったりするので、声をかけて対応する必要があった。
- ② 2人ペアでの活動では、仲の良い友達同士だと2人で楽しくなり遊ぶ姿が見られた。しかし、普段あまり一緒に遊ばない友達やおっとりしている友達とペアにしたり、「〇〇ちゃん、〇〇くんと一緒に片付けてほしいな」「〇〇ちゃんのお手伝いをしてほしいな」などと頼るような声かけをしたりするとスムーズに次の活動に切り替えることができていた。
- ③ 全体の保育の中で子ども一人ひとりが好きなことを話す時間をつくるが、子どもたちの「話したい!」「聞いてほしい!」という思いが強く、それぞれで話し出してしまいうまくいかなかった…。しかし、3〜4人程で誰か1人が話をするようにすると、他の子どもの話を聞くということではできた。



🌸研究の実践・全体を通した考察

「なんとなく気になるな」と思っていた子どもの姿と向き合い、他の人達の知恵と経験を借りることによって子どもにとっても自分自身にとっても良い関わりを考え実践することができた。子どもの困り感を丁寧にくみ取り、受け止めその姿に対する具体的な援助を意識することによって、子どもの得意なこと苦手なことを理解することができ、保育者と子どもの良い関係を築くことができたように感じる。これからも子どもの気持ちをくみ取り受けとめつつその子どもにあった援助をしていきたい。



2 歳児 男児



・身体を動かして遊ぶのが好き

・友達が好き

・指先を使って遊ぶのが好き

・楽しくなると「きゃー」って出る

・言葉よりも先に手が出ちゃう

・発語が不明瞭なところがある

～その後の様子・気付いたこと～

4 月に初めて本児と出会い、気になる所ばかりに目がいき、表面的にしか捉えられず本児の要求に私自身が気付かずにいた。しかし日々を過ごしていく中で“〇〇ちゃんは友達のことが大好きなんだ”そして、友達が大好きだけ言葉もまだまだ未熟で、うまく関わりきれずにいたことに気付いた。

本児が部屋の中を走っていると友達もそれについてきてくれて、体も心も心地よくただただ楽しかったんだと思う。少しずつ言葉のやりとりやごっこ遊びを友達と楽しめるようになってきている。きっと本児の中で走らなくても遊びの中の“楽しい”を友達と共有ができたり、言葉で思いをやりとりできたりするようになってきているからではないかと考える。

上記の手立てであげたことは本児には効果を感じなかったが、他の子どもたちにとってはメリハリがつき見通しがもちやすくなった。そのことで楽しい活動へと向かいやすくなり、保育者も様々な遊びの提供ができ、集団で楽しさを共有できるようになっていった。また、本児については、言葉でのやりとりや本児の気持ちへの共感や代弁を大切に、本児の発達の保障も大切にしてきた。

本児自身も部屋の中で走ることも、友達と言葉でやりとりをしたり、一緒にごっこの世界で遊んだりすることの楽しさに気が付きだし、自分から友達の遊びに入っていく姿も増えた。とはいえまだまだ友達に対して押ししたり、叩いたりしたり、気持ちが抑えきれないと大きな声で泣いたり気になる姿は多々ある。しかし、そういった本児の姿を表面的に捉えるのではなく困った行動の中にある、本当に伝えたい思いや願いに気付けるよう多面的に捉える視点をもっていたい。

気になる姿 🏠 保育室の中を走り回って危ない
(活動と活動の合間によくある)

なぜ? ①走りたい! ②何をしたらいいかわからない

～具体的な援助や手立て～

静と動の活動にメリハリをつけてみた。

例えば身体をたくさん動かしてから部屋に入る。部屋に入る前には一度みんなが集まって名前を呼んだり手遊びをしたりして、集まってから入るようにした。睡眠時は気持ちが落ち着くような音楽をかけてみた。

そのことで、本児の姿はあまり変わらなかったが、周りの子どもたちに静と動のメリハリが少しずつつくようになり、個々にバラバラだったクラスが少しずつ集まれるようになり、次の見通しが持ちやすくなった。見通しがもてるようになってくると本児が走り回っても、クラスの子と一緒に走り回ることが自然と減っていった。

～実践研究を通した考察～

今回、この研究会に参加させていただく中で 1 人の子どものことを複数の保育者、それも、働いている環境も経験年数もバラバラな保育者たちが一つの事例に対して様々な考察を出し合い、意見を交換するのがとても面白かった。

固定された考えや思い込みが自分自身にあることに気付くことができ、自分では考えもつかない視点からの意見をもらえたことで、保育の引き出しがまた一つ増えたりもした。子ども理解とは担任だから! 毎日たくさん共に過ごしているから! できるものだと思っていた。

そうではなく、柔軟に様々な角度で子どもの姿や日々の様子を観察し、手立てや考えられる要因をより具体的にすることが、子ども理解や発見につながっていくんだとこの研究会で学んだ。まずは子どもの要求や願いを理解しようと考えること、それを表面的ではなくて多面的に見て、考えられるような保育者でいたいと思った。

また、いろいろな意見を聞いた時に「そうかも!」「そんな意見もあるんだ!」という違うことが前提と思える自分であることが大切と木曾先生もおっしゃっていたので、子どもや大人に限らず、柔軟に相手の話を聞ける保育者でいたいと、この研究会を通して思った。

個別の経験を超えて本研究会全体で学んだこと。

- ・ 人の意見を聞くことの大切さ。
- ・ 対象児に向けての手立てだったが、他児にも有効的なこともある。
- ・ 色々な手立てを実践する中で、その子どもに合った手立て・援助が見つかる。(失敗はない)

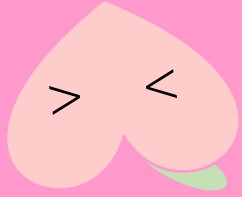


グループで検討した手立てを実践し、うまくいかないこともあったが、違う方法でその子どもに合った手立てを見つけることができた。子どもへの先入観を捨て、様々な目線でとらえ、実践することで新たな子どもの姿を見つけることができた。

一見対象児に効果的でないと思う手立てでも、他児にとって有効的な場合もあるので、失敗を恐れずにまずは行動してみることで新たな発見へとつながる。

今後、それぞれの実践に何をどう活かしていきたいか、また、どのようにすることで生かせるか

- 子どもの「なぜ」を捉えて、見えない部分にも目を向け、一人ひとりのニーズに合わせたインクルーシブ保育を意識していく。
- 今回学んだ知識を自分自身で振り返ることができるように、テキストを定期的に読み返し、保育に取り入れていく。
- 研究会で学んだ意見交流を保育所内でも取り入れて、いろいろな角度からの意見をもらい「そんな考えがあるんだ」と受け止め、保育を行っていく。



ピンクグループ

特別支援教育・保育研究会

好きなこと・強み

- ・一人でレゴブロックや砂遊びで長時間遊ぶ
- ・母が大好きで、母も末っ子のため可愛がっている
- ・担任にも甘え、してほしいことをジェスチャーで伝える
- ・やりたい、してほしいことを明確にもっている

3歳児クラス 19人

男児 外国籍



気になる子どもの姿

- ・遊んでいたブロックが崩れるとひっくり返って泣く
- ◎頻繁に自分で自分の頭をたたいていた
- ◎荷物の準備や手洗いなど生活習慣がなかなか身に付かない
- ・動きが止められず、姿勢が安定しない

保育者の困り感

- (簡単な英語でのコミュニケーション)
- ・気持ちを引き出せていない
- ・言い聞かせや共感ができていない

子どもの困り感

- ・自分の気持ちを泣くことで表している
- ・次に何をするか分からない

なぜ

- ◎ 言葉で表現するのが難しい
- ◎ 記憶が定着しにくい

具体的な援助・手立て

- ◎ 表情カードを使い、英語を交えて気持ちを引き出す
- ◎ 一緒に簡単なパズルや絵合わせカードで遊ぶ

グループ討議や講義を受けての気づき

- ・自分に向けられる言葉(日本語)を音として聞き流しているかも？
- ・自分の気持ちが分かっていない？
- ・ワーキングメモリが少ない？

具体的な援助・手立て後の様子や気づいたこと

- ・表情カードを使うことにより、視線がカードに向き落ち着く
- ・担任に自分の気持ちを理解してもらえることを喜んでいる
- ・言葉(英語・日本語)を真似するようになった
- ・担任との意思疎通が増え、発表会の活動(お店屋ごっこをベースにした表現遊び)を楽しんだ
- ・ひっくり返って泣くことは減り、手助けして欲しいときは「先生」「Help me」と言う
- ・友達を真似たり、顔を覗き込んだりする
- ・見守られながら、自分で身の回りのことをしようとしている
- ・ひっくり返すだけだったが、2ピースの動物の絵合わせカードを動物の名前(英語)を言いながら楽しんでいる
- ・ままごと、パズル、カード、絵本など遊びの幅が広がっている

研究会全体を通しての考察

- ・子どもの気になる姿を、子ども側からの困り感と保育者側からの困り感を分けて考えることで、具体的な援助方法が考えやすかった。また、行事や日々の保育の見直しにも生かした。
- ・一人ひとりを大事にするインクルーシブ保育は、子どもだけではなく、保育者も大事にする保育という話に感銘を受けた。
- ・気になる子どもの「なぜ」を考える時には、合理的配慮や感覚や思考など様々な視点で掘り下げていく。
- ・「従来の保育を見直す」「インクルーシブ保育」をどう行っていくか手探り中だったが、講義を受け、またグループ討議で様々な意見交流を行ったことで、自分の目指す保育が見えてきた。気になる子どもだけではなく、大人も含め一人ひとりが、心地よく楽しく過ごせる保育を日々構築していきたい。

1歳児 Aちゃん

好きなこと・強み

・歌を歌うこと ・ぬいぐるみ

・手先が器用

(シール貼り、縄跳び縄のぽっとな落とし)

気になる姿
園での感情表現が乏しい。

なぜ？

①意思表示を必要としていない。

②保育者へわがままの出し方が
わからない。

～具体的な援助・手立て～

①ふれあい遊びをする。

②本児の楽しいと感じる瞬間を保育者
と一緒に過ごし、感情を共有・共感
する経験を増やす。

～その後の様子・気付いたこと～

- ・保育者と一緒にすると、くすぐったい
時に引きつった笑みを見せるよう
になってきた。
- ・寝る前に寝転がりながら一人で歌を
歌っている。保育者と目が合うと固
まって歌わなくなる姿が見られる。

- ・運動遊びで一本橋を行くと、橋の終
わりかけでニヤッと笑ったり、何度
も繰り返し遊んだりする姿が見られ
た。
- ・友達とジャンプをしたり、手遊びを
したり、電車をつなげて遊んだりし
て楽しそうに過ごしていることがあ
る。

～実践研究全体を通した考察～

研究会を通して、子どもの行動について
深く考えることが必要だと改めて感じた。
目に見えている行動、姿には理由があり、
大人がその理由を発見し寄り添うことで、
子どもとの信頼関係を育み、援助してい
けるものである。クラス内での気になる
行動に対して、「なぜ？」を深く掘り下
げ、様々な援助をすることによって対象
児と深く関わることができ、その子ども
に合った援助を見つけることができた
と感じた。

子どもの姿

2 歳児

友達へわざとぶつかりに行ったり、ふいに押したりする姿がある、また「これ〇〇の！」と主張し、玩具や絵本の共有は難しいことがある。
人や物に対して「これは誰々の？」と、境界線や距離感を繰り返し確かめることが多い。

なぜ??

- ① 自他の区別を確認している
- ② ボディーイメージが持ちづらい

手立て

- ① 机をビニールテープで線引きする
- ② 運動遊びを取り入れる

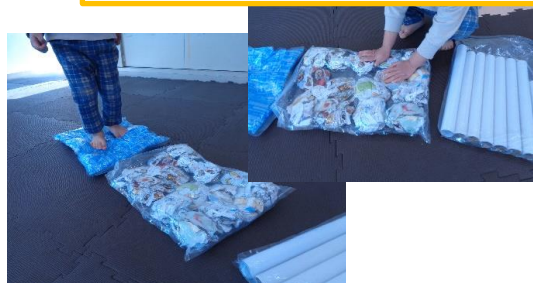
手立て①机をビニールテープで線引きする



様子・気づいたこと

・線のこちらが自分で、向こう側が相手だよと教えると、手で線をなぞったり、自分の物を半分線から出して様子を見ていたりする。

手立て② 運動遊びを取り入れる



様子・気づいたこと

- ・サーキット遊び…トンネルでは直立かハイハイで通る。かがむことを一緒にやってみたり友達の見本を見せたりすると真似して行っていた。
- ・センサリーマットでは、笑顔で遊んでおり「ぶにぶに」等と感触が楽しい様子であった。

研究会全体を通した考察

- ・研究会の見学会で、本児を研究会メンバーや講師に見ていただくことで、客観的視点・多角的に子どもの姿を捉えることができた。(手首をぐにやりとして物を掴む。友達と共有したいときも顔を近づける。)等
- ・朝の会是一列に並んで座り行う必要があるのか?という意見があったことで(→輪になって座る。身体のだこかが動いていても集中しやすい形が◎、並ぶ場面で押し合う→並びやすいための手立てだけでなく、なぜ並ぶ必要があるのか?並ぶ機会を減らす。等)、環境や保育の見直しができた。
- ・今までは困り感のある子や場面を、どうしたら全体やその決まりに楽しく入れられるかという発想で、援助法を考えていたが、今研究会を通して学んだことで、困る子がいる場面や決まりを「なんのために?」「必ずこのやり方でなければいけなかったか?」と見直す視点をもてた。
- ・教えていただいた特性や視点を活かして、「なにか困ってる」を「なぜ?」「この場面ではどうかな」と、保育者として考え続けていきたい、一人ひとりを理解したい・大好きでいたいと思った。

クラス概要
2歳児12名 担任2名
男の子が多い



男児 末っ子
家ではよく話す 電車が好き
ごっこ遊びなどもする

保育所では話さない 表情がない
(家族の前では話す)

【なぜ？】

① いいところを見せたい

② 居場所づくりが苦手

【具体的な援助・手立て】

- 些細なことでも褒め
自信につなげる
- そばにいる

- 姉がいるクラスと交流
する
- 落ち着いて全体を見渡
せる場所で遊べるよう
にする

【その後の様子】

- できたときにタッチなどして喜びを共有した
- 傍にいて困ったときや嬉しそうなき
ほとんど表情は変わらないが変化に気付くこ
とができた

- 姉と遊び弾ける姿があった。姉の友達には声
を出さずに関わる
- 見渡しの良い場所に玩具を出してみたがその
場では過ごさずに友達の近くで過ごすことを
選んだ

▶ その後の様子・気付いたこと

話すことに焦点をあてず、本児が生活しやすく保育所を楽し
いと思えることを目標にした。具体的な支援を考え、行っていくと
保育者がそばにいて安心につながる結果となった。不安にな
ると担任の手や首を触り安心感を得ているようだ。家庭では少
しずつ保育所の歌を歌うことや話をするようになってきた。保
育所では、自分の好きなことを一方的に話す場面が増えている。

▶ 実践研究全体を通した気づき

この研究会で支援計画をたて実践したことで子どもたちの小
さな変化に気付くことができた。複数人で支援を考えることで様
々な考え方や知識を活用して本児への支援を広げていくことが
できたように感じる。子どもの様子のみを伝え意見をもらうこと
で自分の考えと切り離し新たな気持ちで向きあうことができた。
また、保育はこうあるべき！と自然と考えている自分があること
に気付けた良い機会になった。

〈子どもの姿〉

・3歳児男児 4人クラス(男子2名・女子2名)
恐竜が好きでなりきって遊んだり、友達に恐竜の名前を教えてあげたりする姿などがある。
・給食に苦手なものが入っていることに気付かず、食べて泣いてしまうことがあってから、給食前は自分の好きなことをして元気に遊んでいても、給食の時間になると「しんどい」と言って泣き出すことがある。

〈気になる姿〉

給食のときに「しんどい」と言って
泣き出す

〈なぜ?〉



- ◎給食に苦手な食材がある
- ◎気持ちを伝える言葉のレパートリーが少ない

〈具体的な支援と手立て〉

- ① 「しんどい」と言っているときに「〇〇が苦手」と伝えられるようにする。
→嫌なときに苦手と言ってよいことを繰り返し伝える
- ② 「今日は何を食べる?」と保育者が聞いて確認し、自分で食べたいものを選択できるようにする。
- ③ 給食のメニューを一緒に確認し、保育者が食材ごとに分けて食べられる食材を食べるようにする。

〈その後の様子〉

- ① 「しんどい」と言ったときにどこがしんどいか聞くと「外が暑いからしんどい」などと自分なりの理由が言えるようになってきた。給食の食材で苦手なものがあるなら言うて良いことを伝え、「キノコがいや」などと答えられるようになった。
- ② 他児が「今日も全部食べる!」と言うと他児と一緒に「全部食べる!」と答えることが多くなっている。苦手なものが入っていることが分かれると「これは食べられない」などと言うようにもなってきた。
- ③ 給食の食材を一緒に確認したことで苦手なキノコ類や厚揚げなど混ざっていて、目視では確認できないものも入っていることが分かり、気付かず食べてしまい泣くことがなくなった。またおやつサンドイッチなど具が挟まっているものが苦手なため、具とパンを分けて提供したことによって食べられるようになった。



〈気付いたこと〉

・本児の気持ちを代弁したり、本児の気持ちを受け止め自分の気持ちが言えるまで待ったりしたことによって少しずつ自分の言葉で言えるようになった。できることから少しずつ試したことによって本児にとっても保育者にとっても無理なく取り組むことができた。
・食事前に一緒に食材を確認することで、入っている食材に気付くことができた。また他児も一緒に確認することができたので、クラス全体の苦手な食材に気付くことができ、楽しく食事をする姿が多く見られるようになった。本児の支援だけでなく、他児にも良い支援になった。

〈実践研究全体を通した考察〉

・研究会に参加したことで子どもの行動について「なぜ?」の視点をもって見られるようになった。
・グループで実践検討をすることで自分とは違う視点からの考えや発想を聞くことができ、支援につながったと感じる。また自分の保育の視野を広げることもつながった。
・無理のない支援と手立てを取り入れたことやクラス全体で取り組んだことによって支援を必要としている子だけでなく、すべての子にとって過ごしやすい環境にすることができたと感じた。

①個別の経験を超えて、
本研究会全体で学んだこと

②今後、それぞれの実践に何をどのように生かしていきたいか、また、どのようにすることで生かせるか

- ・なぜを掘り下げる

- ・保育を見直す

- ・知識を深める

- ・いろいろな人の意見を聞く、
自分の思いを話す

- ・気になることがあれば、「なぜ？」と具体的に援助や手立てを考えていく。

- ・「～すべき」ととらわれない保育にする。

- ・子どもの様子と知識を照らし合わせて考える。

- ・学んだキーワードを検索したり、資料を読んだりして、学びを深める。

- ・保育者同士で子どもの様子や出来事を意識して共有する。

> <

みどりグループ



4 歳児 男児

こどもの姿

- ・話すことが大好きで、たくさん話をするが、時系列で話すことが難しい。

なぜ？

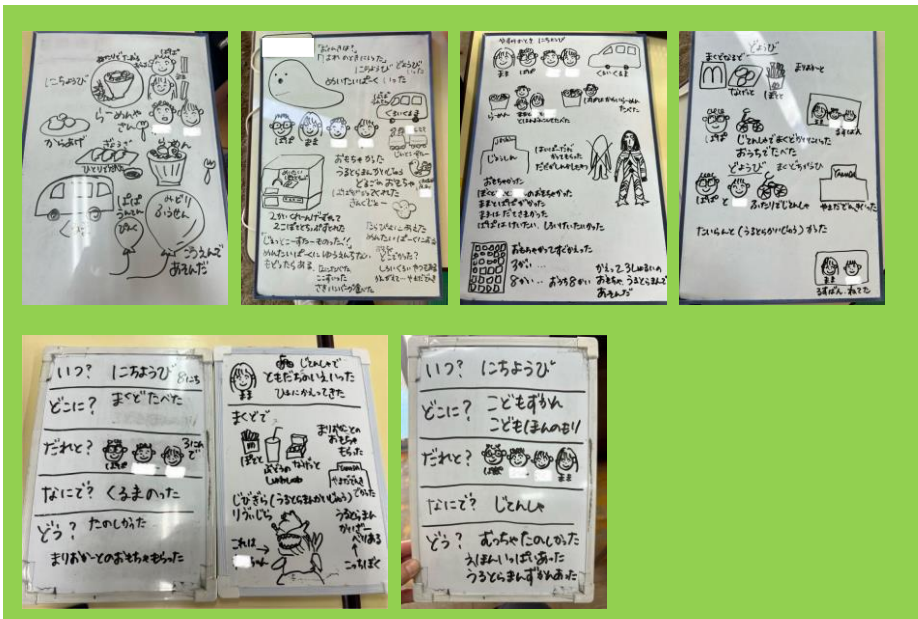
- ・話したいことが頭の中にたくさんある。
- ・頭の中に映像が流れているのかも？

手立て・援助

- ・じっくり話を聞いて、聞いた情報を保育者が絵に描くことで、話の内容を共有できるようにする。
- ・聞いた話の内容を4W1H（いつ・どこで・誰と・何を・どうした）に分けて書くことで、時系列に沿って話す。

その後の様子

- ・以前は話の内容があちこちに飛んだり、時系列がバラバラになったり、急に別の話に変わったりしていて、聞いていても「何の話？」と理解できないことが多かった。
- ・本児の話をじっくり聞きながら、聞いた内容を保育者が絵に描くことで、話したことが視覚的に見え、相手に分かってもらえていると安心して話している様子である。保育者側も理解しやすくなり、書いていない情報を質問すると、それに答えるなどのやりとりで情報を更に深めて共有できるようになった。保護者とも描いたボードを見ながら話すことができ、情報の共有が出来るようになった。
- ・このやりとりを週明けにすることが続くと、この時間を楽しみにする姿が見られるようになった。継続する中で、聞いた情報を保育者が4W1Hに整理してフィードバックするようにしたことで、自分から話すときにも自然と4W1Hを意識して話せるようになってきている。
- ・一方で、基本的に週明けに話をするので、休みの日（土・日）の話がほとんどであるが、土曜日のことなのか日曜日のことなのか正しくないことが多く、曜日の認識が難しい。カレンダーを見せて話をすることも試したが、認識にはつながらない。記憶力はものすごくよく細かい情報まで覚えており、曜日の並びは覚えているが、出来事の記憶と日にちや曜日がつながらない。今後は、他の手立ても試しながら、認識につなげられるようにしていく。



研究会に参加して・・・

今回研究会に参加させていただいて、子どもの姿を分析する大切さを改めて感じました。また、自分の当たり前と思っていた保育を、頭を柔らかくして見直してみることで、子どもの困りが困りでなくなる。保育者も「座って話が聞けるように！」「前を向いて座る。」等させねばならないと思っていたことが、「別の方法もあった！」「しない方法もありなのだ！」等、考えるよい機会になりました。

そして、参加されたメンバーもみんな同じようなことで悩んで日々保育をしていること、自分の視点とは違った意見もたくさん聞かせてもらえ、とても学びになりました。

5歳児 Aちゃん(ダウン症)

- ・14名クラス(男児9名、女児5名)
- ・療育に行く関係で週2回の登所
- ・友達のことが大好きで、よく一緒にままごとをしている



気になる姿 「他者の顔をひっかいて笑う」

なぜ？

- ・コミュニケーションの1つになっている
- ・相手が嫌がっていると思っていない

具体的な援助・手立て

- ① 一人ひとりの写真を用意し、一緒に遊びたい友達の写真を指さして意思表示できるようにする
- ② ハイタッチならOKとカードや実際にやってみて伝えていく

その後の様子

- ① 朝の会で出席者を確認するために支援ボードに一人ひとりの写真を貼った。初めて見たときは、新しいものに興味がある様子で見つめていた。保育者がよく遊ぶ友達の写真を見せると、写真を持って見ながら嬉しそうに保育室を歩き回る姿があった。しかし、遊びたい相手の写真を持ってきて意思表示することは難しい様子であった。
- ② 友達や保育者をひっかく姿が見られた時は「やめてね」の絵カードを見せるが理解までは難しい様子。ひっかかれた友達と「ハイタッチはマル！」と伝えながら一緒にハイタッチを繰り返していった。できたときには「マル」とジェスチャーと声かけで認めていくことを続けたことで少しひっかきの回数は少なくなってきた。



気付き

- ・写真と本人の一致も難しかった様子。何度か写真と本人を並べて伝えていくことで少しずつ一致につながっていった。
- ・遊びたい相手の写真を指さしたり、持ってきたりすることはできなかったが、保育者がよく遊ぶ友達の写真を渡すと指をさして微笑む姿があった。
- ・絵カードよりも実際にやって見せるほうが理解につながりやすかったようで、「ひっかくのはやめてね」とジェスチャーで伝えていくことが必要であった。

実践研究全体を通した考察

- ・研究会に参加するまでは、気になる子どもの姿があっても「なぜそのような姿が見られるのか」ということを意識できていなかった。研究会全体を通して、「なぜ？」を追求していくことによって、一人ひとりにあった援助をしていくことができることを学んだ。
- ・研究会では、他園所の保育者の方々と気になる子どもの姿について話すことができ、毎日の保育では考えられない客観的な意見を聞くことができ、新たな気付きや発見が多かった。また違う考え方を知ることができ、自分の保育の幅が少し広がったと感じるため、普段の保育から他の保育者と相談をしていきたい。

クラス概要

14名クラス 男児7名 女児7名
担任1名 加配1名

気になる姿

自分が言った悪口や暴言などを、
他人が言ったと言う

子どもの姿

A児 5歳児 男児

週5日～7日療育に通っている

(平日は給食後から夕方まで)

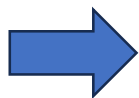
ゲームやYouTubeが好き

1番へのこだわりがある

大人や、しっかりしている友達に甘えることが好き

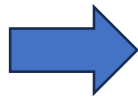


なぜ？



- ① 怒られたくない
- ② 頭の中で事実とは違う物語ができてしまう

援助
手立て



- ① 一つでも事実を認められたら、その姿をしっかりと認める
- ② コミック会話等を使い、自分の言動を客観的に見る

その後の様子



実践研究会全体を通した考察

この研究会を受けるまでは、子どもの姿をよく知っている者同士で話し合わないとか的を得た議論ができないのではないかと考えていたが、クラス外や園外の保育者と話して新たな視点を得ることの重要性に気付いた。また、日々を通して子どもたちと向き合い、特別支援教育について学んでいくことはもちろん大切だが、「〇〇だから」と決めつけるのではなく、常に色々な理由を並行して考え、支援を実践することで、その子にとって居心地の良い環境をつくることのできるのだと思った。

- ① 以前はA児の誤解が発端となりトラブルになることが多かったが、そのようなことは少しずつ減ってきた。また、別のこと(玩具の貸し借り等)でトラブルになった際も、他児のせいにしてしまうことは多いものの、事実と異なることを訴えるのは減ってきている。
- ② 言い合いのトラブルがほとんどのため、絵で表現することができなかった。今後は、本児とのコミュニケーションツールとして活用していきたい。
トラブルが多い時期と少ない時期にムラがあり、多い時期は何度も同じトラブルを繰り返している。今後は気持ちを安定させてコミュニケーションをとっていくことが課題であると考えている。

子どもの姿

- ・ 4 歳児
- ・ 人が好きで優しく、正義感も強い。泣いている子がいると助けようとする。
- ・ 友達に優しい口調であったとしても注意されると（片付ける時間であることや手を洗うように声をかけられるなど）「意地悪なことを言われた」と保育者に伝えている。
- ・ 体を自分で制御することが難しく、目に入ったり気になったものがあったりすると、そこへ走って行く。
- ・ 常に体を動かしている。

気になる姿

- ・ ゲーム遊びの際、負けるかもしれないと感じると泣いてパニックになる



なぜ？

- ・ 勝ち負けに強くこだわりをもちやすい
- ・ 負けは悪、勝ち善という考え方になりやすく、負けることを極度に拒絶する
- ・ 気持ちを自分で切り替えることが難しい

具体的援助、手立て

- ・ 負けたとしても、もう一度参加できるという経験を重ね、1 回負けたけど次もできるから大丈夫、というように許容範囲を広げられるようにする。
- ・ 負けたとしても頑張っていたことが素敵ということを伝えていく。
- ・ 気持ちの切り替えが難しいときは気持ちの表情カードを用いて、自分で気持ちを視覚的に確認しながら表現できるようにしていく。

その後の様子

- ・ ゲーム遊びで負けたときに泣きつつも「吹もできる？」と確認したり「もう一回したい」や「次は勝ちたい」と伝えたりするようになってきている。
- ・ 表情カードを使うと少し気持ちが落ち着くようで、泣くだけではなく「いまこの気持ちやねん」と話している
- ・ 状況の変化に合わせて思考や行動を推移させることが難しいという認知特性があり、ゲーム遊びで負けると負けたということにとらわれ続けやすい姿は引き続きみられる。

実践研究全体を通した考察

- ・ 子どもの姿や行動から、なぜなのかを考えるときに、その子どもがどう感じているのか、どのような考え方、感じ方をしているのかを知ることが大切である。
- ・ 子どもの姿をよく見て考えるとともに認知特性を知ることが大切である。
- ・ 子どもの姿や特性を職員間で共有して話し合い、一緒に支援方法やなぜその姿が出ているのか考えていくことが大切。

5 歳児 男児
クラス 23 名 担任 2 名



- ・注意欠如多動症
- ・電車と車が大好き
- ・いつも元気いっぱい!
- ・友達と遊ぶのが大好き
- ・LaQ で作り方の本を見ずに、自分で想像して立体的な電車や車を作ることができる
- ・興味の無いことに意欲をもちにくい

【気になる姿】

友達が嫌がることをして、
友達の行動や反応を見て笑う

なぜ?

友達が反応してくれるのが楽しい

なぜ?

友達との関わり方が分からない

☆特に活動の切り替え時と朝の会に多い
→活動の切り替えを減らすことはできないのか? 伝え方に工夫はできないのか?

具体的な援助・手立て

☆全体で話す形、座り方、伝え方を変える

切り替えの回数を減らしたり、朝の会での伝え方を見直したりすることで、気になる姿が多く見られる場面を減らしていけるようにする

☆反応を感じられる遊びを、保育者と一緒にする

(ふれあい遊び・アルプス一万尺・だるまさんが転んだのオニ)

本児が楽しい反応を感じられる場面を多くつくり、友達と楽しく遊びながら関われるようにする

その後の様子・気付いたこと

- ・朝の会や活動の切り替えについて様々な視点からいただいたアドバイスを踏まえ、クラスの 1 日の生活の流れを見直した。「朝の会では端的に分かりやすい言葉で伝え、短い時間で終わるようにする」「子どもたちが見通しをもてるように、時間を伝えてから始める」「朝の用意が終わったらすぐ所庭で遊び、遊ぶ時間を多く確保できるようにする」等を心掛けたことで、本児を含め他の子も活動の切り替えで気持ち不安定になることが減り、トラブルになる機会を少し減らすことができた。
- ・保育者だけでなく、友達とも♪アルプス一万尺をととても嬉しそうなる表情で楽しむようになった。参観での好きな遊び披露の場でも、手遊び・手合わせを自分で選んだ。

どちらも、気になる姿がきっかけで起こるトラブルの機会を少し減らし、友達と楽しい関わりをもつ機会になった。しかし、これだけでは気になる姿は変わらず、まだ続いている状況である。

研究会全体を通した考察

グループの全員で気になる子どもの姿について「なぜ?」を考えて出し合うことで、客観的に子どもの姿を捉え、新しい視点からの「なぜ?」に気が付くことができた。手立てについても「全体への支援」「個別の支援」「物的環境」に分けて考えることで、様々な面からの援助方法を多く学ぶことができた。

研究会に参加する中で、子どもの気になる姿について 1 人で考えていくのではなく、周りの人に共有し、客観的な視点から考えていくことで、保育所全体での子どもにとってのより良い支援につながると感じ、今後も共有する、話し合うことを意識していきたいと思った。また、普段の保育の中でつい習慣となっていることも、なぜその方法で行っているのか、他の手段ではできないのだろうか、と新たな視点で保育を見直し、柔軟に考えていくことの大切さを感じた。

これからも「なぜ?」の視点から子どもの姿について考えることを意識し、研究会で学んだことを今後の保育に生かしていきたい。

★クラスの概要

5歳児クラス 22名 保育士3名

★子どもの姿（男児）

- ・人と関わることが好きで、クラスの活動に意欲的に参加する。
- ・友達同士のいざこざを仲介したり、困っている人を手伝ってくれたりする。
- ・友達への細かい注意が多い。（自分がルールを守れていないこともある）
- ・感情の起伏が激しく、イライラすると、人を蹴ったり、威圧的な言葉を言ったりする。



【なぜ？①】

- ・マイルールが多く、他児がルールに従ってくれなくて、イライラが積み重なっている？こだわりの1つ？

【なぜ？②】

- ・感覚過敏で不安感や不快感をもちやすい？

【具体的な援助・手立て①】

- ・「ま、いっか」と気持ちを切り替えることができるような絵本を読む。
- ・読んだ絵本を見える場所に常に掲示しておく。



【その後の様子・気付いたこと】

- ・クラスの雰囲気として、うまくいかないことがあっても、合言葉のように「いいから、いいから、ま、いっか」と言うことが多くなった。本児もつづやく場面があり、小さなイライラの積み重なりは少しずつ減ってきた。1対1で気持ちを受け止めることも大切だが、自ら気持ちを切り替えることができるような手立てが必要であったと気付いた。
- ・手にとれる場所に絵本を掲示しておくことで、友達と「ま、いっか」と言い合いながら楽しく読んでいた。

【具体的な援助・手立て②】

- ・いつでも入ることができる1人空間を保育室につくる。



【その後の様子・気付いたこと】

- ・気持ちが崩れた時に自らそのスペースに入ったり、保育者が誘いかけると移動したりしている。時間が経つと、落ち着いた状態で保育者の近くに来て、話をすることができた。しかし、話をしないまま自分で戻ると、モヤモヤを引きずった状態なので、保育者と話をして切り替えることができるようにする必要があると感じた。

【実践研究全体を通した考察】

- ・子どもの行動には様々な「なぜ？」があり、複数人で共有し、多面的な角度から行動の理由を考えることが大切だと思った。また、その子どもの目線になって考えることで、支援方法が見えてきたり、子ども理解が深くなったりすると感じた。
- ・個別の「なぜ？」を探ることで全体への手立てを考えることにもつながった。個別へのアプローチも大切だが、集団生活の中でクラス全体に支援できることはないか模索していきたい。



本研究会全体で学んだこと

- ・ 保育の流れや在り方を柔軟に考えていくことの大切さに気付いた。
- ・ 他の保育士との話し合いや質疑応答を通して新たな見方や考え方を知れた。
- ・ 他園所の子どもの様子と自園の様子が重なる部分も多く、みんな同じように悩んでいることを知った。また、様々な意見を出し合うことでより深く子どもを理解したり、手立てが広がったりした。





今後の保育に活かすこと

- ・ 今回の研究会で行ったワーク（気になる姿→なぜ？→手立て・援助を考える）を元に、子どもの言動の奥にある、「なぜ？」を考える大切さを伝えていく。
- ・ 可能なら、月1回の保育会議等で、子ども一人を取り上げて、検討する時間がもてると所内全体で共有することが出来ると思う。



～研究会に参加して学んだこと～

- ・研究会に参加したことで、子どもの行動には必ず理由があることや、その行動の「なぜ？」の部分を考えていくことでその子どもに合った手立てを考えることができた。
- ・日常の生活の流れ等、これまで当たり前だと思っていた保育は当たり前ではなく、“〇〇でなければならない”という考えをなくし、いろいろな方法ややり方を取り入れていこうと思うようになった。
- ・支援検討シートを使用することで、抽象的に捉えていた子どもの姿を言語化することによってどのようなことに困っているのか、どのような支援をしたらよいのかを具体的に検討することができた。
- ・グループで事例検討することで、一人では思いつかなかったことも別の視点から意見をいただくことができ、新しい気づきや学びにつながった。
- ・自園所では、クラス内では、検討した対象児について内容を共有し、手立てやクラスの見直し（朝の会の行い方、声掛け等）を話し保育を行うことができた。保育所全体へは、会議で研修報告という形で、検討内容や実施後の様子を共有することができた。

～今後に向けて～

- ・自分自身の思い込みだけで子どもの行動を決めつけるのではなく、子どもが出す小さなSOSに気づき、もしかしたらこう考えているのかもとあらゆる理由を考えながら接していき、少しでも子どもの困り感を解消してあげられるような保育をしていきたいと思った。
- ・子どもの気になる姿や「なぜ？」を考えることを意識して、個々に合わせた具体的な援助・手立てを考え実践していくことが、一人ひとりの子どもを尊重した保育につながっていくと実感したので、今後の保育でも意識しながら生かしていきたい。また、自分一人で考えるのではなく、保育所の職員や家庭と連携してより良い保育を目指していきたい。

講師講評

研究会メンバーのみなさん、1年にわたる研究会への参加と実践、ありがとうございました。最後の報告会もお疲れさまでした。報告会では舞台上で一人ずつマイクをもってご自身の事例を報告していただきました。その姿を見て、私はこの1年みなさんが目の前の子どもと、何より自分自身とに向き合ってくださっていたことを改めて感じ、胸が熱くなりました。

今年度は保育経験年数の短い先生も多く、それゆえの悩みも多く話題に出ていたと思います。保育者も人間なので、時に子どもにイライラしてしまうこともありますよね。でも、それは「その子のせい」でも「あなたのせい」でもないかもしれません。“保育の方法や環境を変えることで、子どもは変わる”。保育者自身が楽しく保育できること、それが何より子どもへの支援になります。

また、保育経験が長くなっても悩みはつきもの…。今までやっていた保育ではうまくいかない苦しさは、経験年数が長いほどに強く感じておられるかもしれません。その中で、今までの保育にとらわれるのではなく、目の前の子どもに向き合って、子どもに合わせた保育をつくり出していける先生方を頼もしく、ありがたく感じていました。これからも子どもとの日々のワクワクを大事にしていきましょう。

今年度も4か所の園にご協力いただき、実際の子どもの姿の観察も実施することができました。実際に子どもの様子を見ることで、より深い理解や保育の振り返りにつながりました。ご協力いただいた園のみなさんにも改めて感謝申し上げます。

「インクルーシブ保育」ということばが、少しずつ保育・幼児教育の中に浸透してきています。ですが、その意味について共通認識をもつことはまだまだ難しいと感じています。インクルーシブ保育は、一人ひとり違う子どもたちに合わせて保育をつくっていく「プロセス」です。これからは共に対話する中で、すべての子どもにとってよりよい保育を一緒に考えていきましょう。

木曾 陽子